

生徒参加によるシティズンシップの育成  
—長野県辰野高等学校における生徒アンケートの分析を通して—

学校教育専攻  
発達臨床コース  
渡邊 修平

## 1. 問題と目的

近年、三者協議会という生徒と父母、教職員の三者で行う協議会を中心とした生徒参加実践が注目されている。このような取り組みは、生徒にとっては子どもの権利条約で保障されている権利を行使する場となるし、自らのことを自らで決めるという民主主義的経験を得る場となっている。

このような取り組みが注目される中、生徒参加がシティズンシップを育成すると指摘する声も出てきた。例えば、地域社会への参加がシティズンシップの育成に重要なことや、生徒が授業評価への参加を通して市民性を獲得することができることなど学校教育におけるシティズンシップ育成の可能性が指摘されている。では、これらの指摘が示すような地域参加や学校参加は、シティズンシップとどう関係しているのだろうか。また、どのような生徒参加が、シティズンシップのどのような側面と関係しているのだろうか。

そこで本研究では、生徒参加がシティズンシップ能力に関する自己認識とどのように関係しているかを検証することを目的とする。そのために、まず、戦後教育における生徒参加がどのような意義や役割を期待されていたか概観し、そして生徒参加に積極的に取り組んでいる長野県辰野高等学校第3学年174名(普通科107名,商業科67名)を対象に2008年9月下旬から10月上旬にかけて実施したアンケート調査を分析する。

## 2. 本研究の構成

序 章 研究の目的と方法

第1章 戦後の日本教育における生徒参加の位置づけ

第2章 調査対象校の概要とアンケートからみる生徒の状況

第3章 生徒参加とシティズンシップ能力に関する自己意識の関係

終 章 結論と今後の課題

## 3. 本研究の概要

序章では、シティズンシップを構成する要素を説明し、シティズンシップを「知識」「スキル」「意識」3つの側面から捉えていくことを示した。

第1章では、戦後の日本教育における生徒参加の位置づけを概観した。まず、戦後間もない1950年頃の文部省の著作を用いて、教育方法として生徒参加が位置づけられていたことを明らかにした。次に、生徒参加を自治活動として捉える論調が1960年代から1970年代においてみられることを明らかにした。最後に、生徒参加が生徒の権利として捉える論調が1990年頃からみられることを明らかにした。これらの論調は、語られる視点は異なるものの、生徒参加の目的が「公民性の教育」であることは一貫していることがわかった。

第2章では、まず調査対象校の概要を述べ、

アンケートから生徒の状況を明らかにした。そこから、生徒の学校生活は総じて充実していることがわかった。次に、生徒参加を文化祭、学校課題を解決する取り組み、三者協議会、ボランティア・地域活動の4つの活動から捉えて生徒参加の状況をみると、75.0%の生徒が生徒参加を経験していることが確認され、そして参加した者は1つの活動のみに参加した生徒と複数の活動に参加した生徒に二分されることが明らかになった。さらに、生徒のシティズンシップ能力に関する自己意識を「知識」「スキル」「意識」の側面からみると、各々が総じて高い傾向にあることが確認された。また「意識」については、回答にばらつきがみられることが確認された。最後にその3つの要素の関係をみると、1つの要素が高い生徒は残る2つの要素も高い傾向にあることがわかった。

第3章では、生徒参加とシティズンシップ能力に関する肯定的な自己認識との関係について検討した。まず、文化祭への参加に注目してみると、男子では参加した者の方が肯定的な回答が多くなった項目とそうでない項目があり、やや矛盾する結果となったが、女子ではほぼ一貫していた。

次に、学校課題を解決する取り組みに注目してみると、男女ともに一貫していることが確認された。

続いて、三者協議会への参加に注目してみると、男女ともにほぼ一貫して確認できた。

さらに、ボランティア・地域活動への参加に注目してみると、男子では一貫しない結果となった。女子では、ごく少ない項目において参加者のほうが肯定的な回答をする割合が高い一方で、複数の項目で不参加者のほうが肯定的な回答をする割合が多く矛盾した結果となることが確認された。

最後に、4つの活動を全体的にみると、学校課題を解決する取り組み、三者協議会の2つへの参加は、男女ともシティズンシップ能力の肯定的な自己認識と関係しているのに対し、ボランティア・地域活動への参加は男女ともに一貫しない関係という結果であった。そして、文化祭への参加は男女によって対照的な結果となった。

終章では、本研究の結論と得られる示唆について考察した。第1に、学校課題を解決する取り組みと三者協議会の参加活動において、生徒参加とシティズンシップ能力に関する自己認識の肯定的な関係がみられたことから、自己にある程度関わっており、同時に外のコミュニティとの関係を多少なりと必要とする活動がシティズンシップに関する自己認識と肯定的な関係を示すといえる。

第2に、学校課題を解決する取り組みと三者協議会への参加は、とりわけ「スキル」に関する項目で肯定的な自己認識と関係がみられたが、それらは意見表明権に関する自己認識をはじめ、リーダーシップや物事の決定、課題を設定する能力などをも深めていることが明らかになった。

#### 4. 今後の課題

第1に、生徒参加とシティズンシップ能力に関する自己認識の関係がみられる活動とみられない活動があった。それがどのような要因で生じている現象なのかを明らかにすることが必要である。第2に、1校の事例研究であったため、より多くの学校を対象にして研究を重ねていき、生徒参加とシティズンシップとの関係をより明らかにしていく必要がある。

指導 藤田 武志